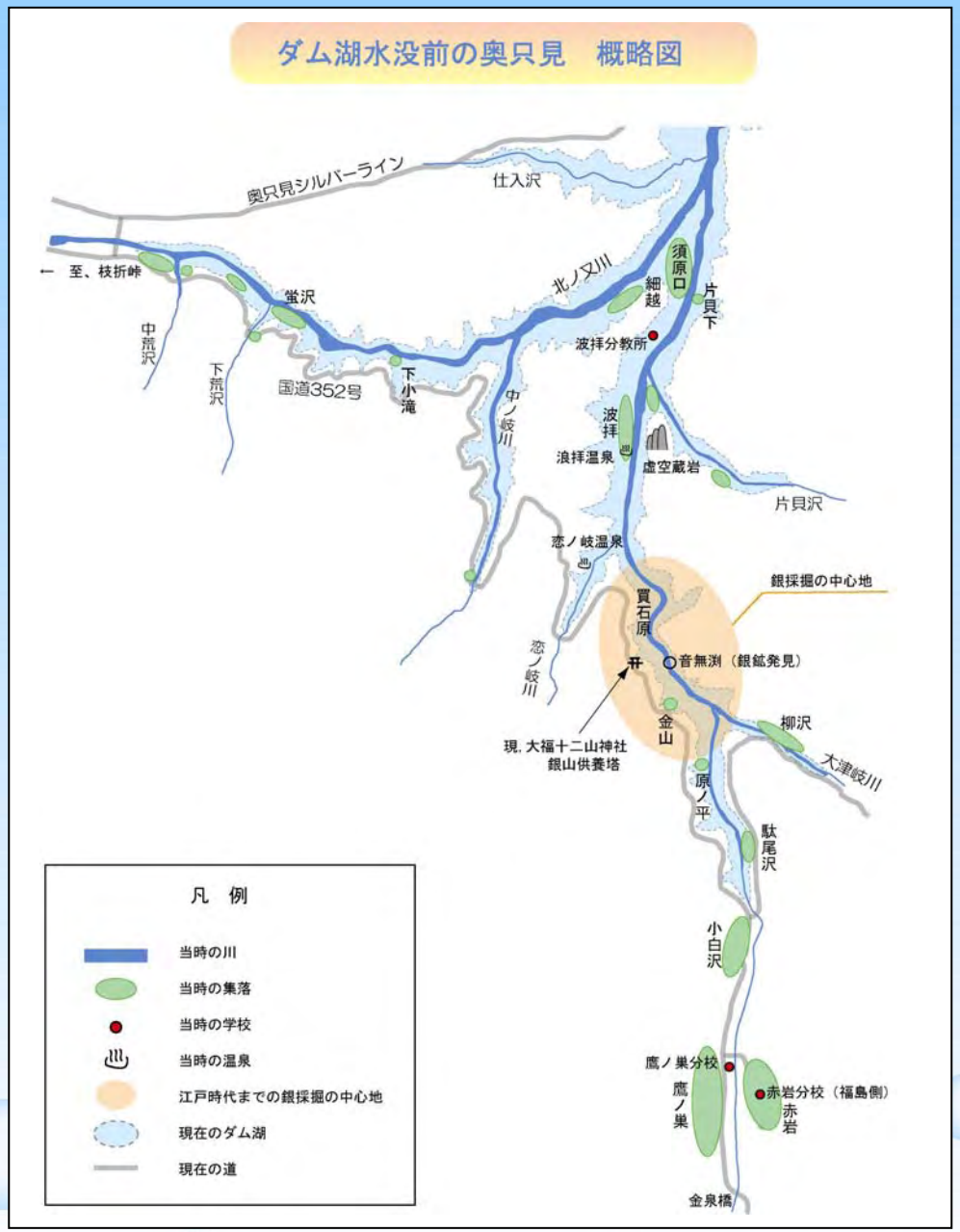
川にまつわる ものがたり ③

奥只見　原生林が辿った歴史



1．原生林に育まれて　～銀の発見以前の狩猟採集～

只見川　悠久の流れ

大湯村、芋川村、折立村、宇津野村等の湯之谷の人たちは、奥只見が銀山で栄える前の 1500 年代後半くらいから、枝折峠を越えて、奥只見に入っていました。川鱒漁やカモシカ･熊狩り､ゼンマイ採り、曲げ物の材料となる檜の採集などのためです。

現地では出づくり小屋をしたてて、そこを拠点に猟や採集をしていました。入会地というのがあり、村ごとに入ってよい地域が決められていたようです。これら山の幸は村人の貴重な食糧や生活用品になったほか、年貢としても納められたといいます。

そして、来る 1641 年 7 月 9 日のこと、折立村の源蔵という人が、いつものように只見川で川鱒漁をしていたところ、水中に白く光る石を発見しました。これを持ち帰り調べてもらったところ、銀の鉱石であることがわかりました。さっそく、この地を統治していた高田藩に知らされます。これが銀山時代の幕開けとなります。

サクラマス（川鱒）

2.原生林が鉱山町に　～銀山開発の時代～

銀山は、江戸時代初期から末期の間に断続的に経営されることになります。本格的に採掘が行なわれたのは、1657 年～1681 年の高田藩経営の 25 年間、1690 年～1705 年の幕府経営の 16 年間、1850 年～1860 年の山師・正田利右衛門の請負経営の 11 年間の三期間です。その他の期間にも、様々な山師の入山や経営が行なわれたのですが、短い期間であったり、試掘の段階で終わっていたりしました。

銀山の位置は、現在でいう「銀山平」とは異なり、恋ノ岐川出会いから大津岐川出会いにかけての只見川流域です。左岸は越後側に属していて上田銀山と呼ばれ、右岸は会津側で白峯銀山と呼ばれていました。これらは現在、大部分が奥只見ダム湖の底に沈んでいます。

ここで採れる銀は、その表面が花を散らしたような文様がみられたことから「花降銀」という美しい名前がつけられました。また、銀山では銀のほかにも鉛などが採掘されていました。特に江戸末期の正田利右衛門の時代では鉛が主な採掘の対象となっていました。

大福十二山神社の御手洗鉢
高田藩は、銀山開発に着手した 1657 年に山の神を祀る神社を建立した。この御手洗鉢は建立当時に奉納されたもの。

銀や鉛の産出量

さて、興味深いのはここでどのくらいの銀や鉛が採れていたのかです。

最も繁栄していた幕府経営時代には、銀の産出量は多い年で約 1300kg、少ない年では 400kg 前後でした。また、正田利右衛門の経営時代の鉛の出鉛高は、毎年 38,000kg 前後だったといいます。

ここで暮らした人の数

それでは、銀山では何人くらいの人が働いていたのでしょうか。米の消費量から推定すると、幕府経営時代の最盛期には、1000 人から 1500 人くらいの人がいたと言われています。数十人の役人のほか、短期間の労働者、採掘が行なわれる夏場の半年間の労働者、その他、精錬の際に必要な炭焼きの労働者などがいました。労働者たちは、主に魚沼や会津の人たちが中心で、村の使役として課せられたものでした。

銀山の発展とともに

奥只見で採掘が行なわれることになれば、物資を運ぶための道が必要になります。このとき、魚野川ほとりの小出島と銀山とを結ぶ街道が整備されました。全長約 50 ㌔、現在ハイキングコースとなっている「銀の道」は、この街道の一部で、最大の難所でした。山の麓にある大湯は、温泉もあったことから、荷揚げ基地として賑わったそうです。

また、小出島は物流の拠点として、栄えることになりました。魚沼や高田のほか、北陸・近畿、群馬などから多くの商人たちが移り住んできて、銀山で必要な酒、塩魚、味噌、塩、豆腐、青物、縄、筵、紙など生活物資の商いを行なっていました。商人たちは、鉱山が閉鎖した後も小出にとどまり、昭和中期までつづく製糸業の発展に貢献することになりました。

このように、小出の町の発展は銀山の開発と密接に関係していました。

銀山間歩（坑道跡）
ダム湖に水没せずに残った数少ない坑道のひとつ。十二山神社の付近にある。

石臼
当時、採鉱に使ったもの。十二山神社にある。

3. 秘境の山に夢見たユートピア　～開拓の時代～

明治時代になると、銀山での採掘はほとんど行なわれなくなり、再び山に静寂が戻りました。

そして、開拓の時代が始まります。豪雪地帯で平坦地も少ない魚沼地方では農地が不足していて、農家の二、三男対策に苦慮していました。そこで、只見川や北ノ又川沿いに伸びる細長い平坦地を開墾し、ここにユートピアをつくろうという人々が現われました。

本格的に開拓が始まったのは明治 43 年からで、主導となったのは銀山拓殖株式会社です。入植者を募集し、開墾した土地の四分の一は入植者に無償で譲渡し、残りの土地からあがる収穫のうちの何割かを会社が取得する、ということが原則でした。入植した人には家の建築資金を融通するなど、様々な会社からの支援もあり、入植者たちは会社への感謝の念を忘れなかったと言われています。

明治 43 年には、南・北魚沼郡や古志郡から 30 戸、会津の桧枝岐村から 10 戸ほどが入殖しました。その後増減しつつも、大正から昭和初期の一番にぎやかだった時代には 30 戸前後がここで生活をしていたようです。

この山奥の秘境ともいえる奥只見で、開拓に入った人たちはどのような生活をしていたのでしょうか。

鷹ノ巣の開拓村の一家
おねえさんに抱かれた赤ちゃんもいる。
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

小沢平の原野　開拓初期の風景
積雪期に木を切り倒すので、切株は長い。
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

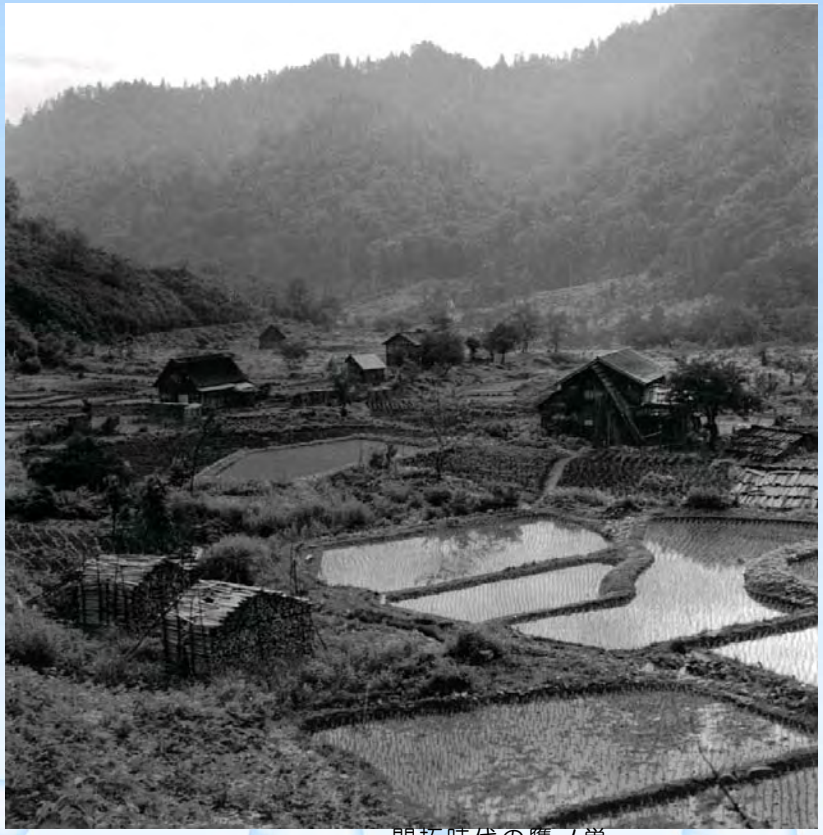
主な生業

畑作が中心で、そば、粟、稗、とうもろこし、かぼちゃ、ばれいしょ、などが盛んにつくられました。水田は開拓村全体で最高で３町７反までできましたが、なにしろ豪雪地域のために耕作期間が限られ、寒さも厳しい土地だったため、思うような収穫は望めず主食は雑穀等に頼らざるを得ませんでした。雑穀にしても、冷害の年やネズミが大発生した年などは満足な収穫もままならない状況でした。どんぐりや栃の実などを雑穀に混ぜて食べることもあったといいます。

しかし、山の幸は豊富にありました。春のぜんまい等の山菜、秋のきのこは自分達の食糧にあてる以外に出荷もしていました。動物は、ウサギ、ムササビ、テンなどを捕獲し、毛皮にして換金しました。クマは、特に毛皮と胆が高値で売れ、明治末から大正の頃では、同じ重さの純金と同じ価値があったといわれています。当然、肉も食糧として貴重なもので、味噌や塩に漬けて保存食としました。そして、鱒やイワナもふんだんに生息していて、村人の日々の蛋白源として重要でした（川にまつわる物語②参照）。

このほか、木工品も重要な産業でした。銀山の時代には精錬で用いる炭を調達するために、この地の木が次々と切られましたが、その後に育った樹齢 200 年ほどのブナが大森林を形成し、中に入ると空が見えないほどだったと言われています。このようにふんだんにあったブナや檜、

コスキづくり
木工品づくりは、冬の主な仕事であった。子供も立派な労働力。
木工品をつくるための道具は自作のもので、専用工具が何種類もあった。（魚沼市　櫻井琢也さん提供）



開拓時代の鷹ノ巣
今では大部分が原野に戻っている鷹ノ巣も、当時は水田もあった。
集落周辺の木は、燃料調達などのために切られるので、開けた感じになっている。（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

松、トチノキなどを切って、木鋤、鍬柄、下駄、柄杓などに加工し、出荷しました。

また、開拓村のかなりの面積の畑は桑畑で、盛んに養蚕も行なわれていました。さらに、銀山平でできた繭を糸に加工して山から下ろそうと、須原口には銀山拓殖株式会社が設立した製糸工場があり、多い時には十数人の女子従業員が働いていたといいます。

山の木を切る
積雪のある３～４月に山に入る。尾根に近いところで木を切って、斜面の雪の上を滑らせて下に落とす。短く切って、雪が消えたらそれを回収する。
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

トピックス　～熊狩り～

熊狩りに山に入ったとたんに山も熊もすべてが神として扱われました。このため、仕留めた熊に引導を渡す儀式など、熊狩りの際に行なう儀式は十数種類もありました。また、独特の山言葉を使っていたといわれています。熊狩りは数人のチームを組んで行なわれ、その大将は、儀式の時の呪文をすべて覚えている人しか努めることができませんでした。

熊狩りは、冬眠から目覚めた熊がまだ穴の中にいる早春が最も適していました。熊の入った穴を見つけると、木の枝などを入口からどんどん突っ込みます。熊は手前のものを手で掻き込む習性があるため、しまいには、熊のいるスペースがなくなり、穴から出てくることになります。また、松明を穴に投げ入れて燻り出すこともあります。このようにして、穴から出てきた熊を槍で突きます。ねらいは熊の胸の三日月模様です。槍は長さ２ｍほどありますが、手でしっかりと持つと意外と短く、熊の熱い息が顔にかかるくらいに接近した、と言います。

奥只見の熊
（魚沼市提供）

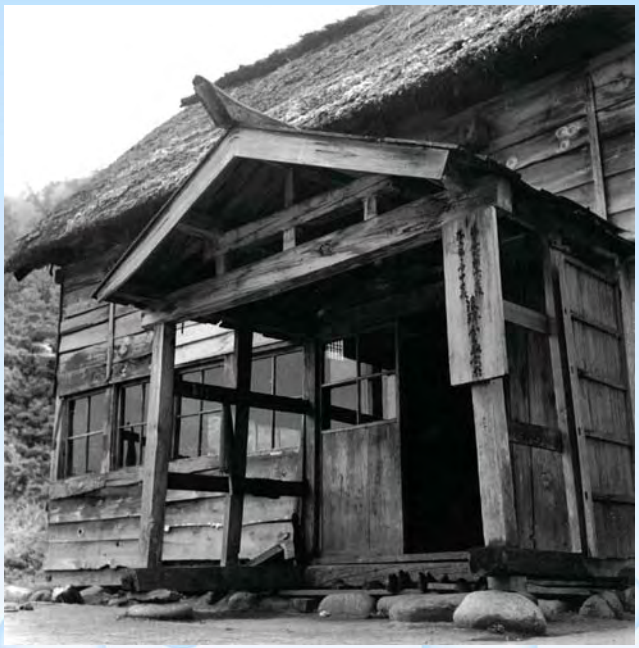
熊狩りの儀式にみられるように、開拓村に暮らす人たちは、山のあらゆるものに敬意と感謝の念を忘れずに、つつましく暮らしていたことが伺えます。

鋸の目立て
家を建てるときも、近くの山で調達した木を材料にし、自分たちで建てた。
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

山の学校

入植が始まった当初、開拓村には子供はいなかったのですが、やがてここで子供が生まれるようになりました。開拓の村では意外と子供が多く生まれ、１０人もの子供がいる子沢山の家もあったといいます。子供がいるからには今度は教育のことを考えなければなりませんでしたが、山奥の秘境の地だったこともあって、学校の開設になかなかこぎつけずにおりました。

子ども達の無教育がかわいそうだということで、片桐貞一という青年が昭和２年に民家を借りて寺子屋式の教育を始めたのが開拓村における教育のはじまりです。そして昭和６年には、波拝に「銀山寺」ができ、そこが待望の校舎として使われるようになりました。正式には「湯之谷村立折立尋常小学校銀山分教所」といいます。初めての先生は、戸田実さんという人でした。銀山平一帯は細長い盆地なので、遠いところの子ども達が波拝の学校に毎日通うには無理があります。そこで、一週間交代に先生が移動するという、ユニークな方式が採られました。先生は波拝の分教所で一週間教えたあと鷹ノ巣へ移動し、そこの民家を借りて（昭和15 年には村で茅葺の「校舎」を建設）また一週間教えるということの繰り返しでした。黒板や机イスなどは親の手作りのものでした。



昭和 24 年に建てられた波拝分校
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

子供とはいえ、家族の大事な働き手でもありました。このため、山の幸の収穫時期にあわせた「ぜんまい休み」があったといいます。また、豪雪地のために冬季は閉校で、原則として５月上旬から 11 月上旬の間の学校でした。その後、昭和 24 年には、波拝にも鷹ノ巣にも校舎ができ、教育環境は改善されました。ダムに沈まなかった鷹ノ巣の分校は、昭和 42 年に全戸が下山するまで続きました。ところが、鷹ノ巣の人たちは里に下山したといっても、雪が消えてから秋までの期間は山に帰り、山菜採りや木工品作りなどで生計をたてました。このため、下山した翌年から、今度は「夏季分校」として鷹ノ巣に再び学校が開設されることになりました。

赤岩橋を渡る子ら
只見川を隔てて、福島県桧枝岐村の赤岩分校と新潟県湯之谷村の鷹ノ巣分校が近接していた。普段は別々で授業をしていたが、運動会などの行事の時には一緒になって楽しんだ。（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

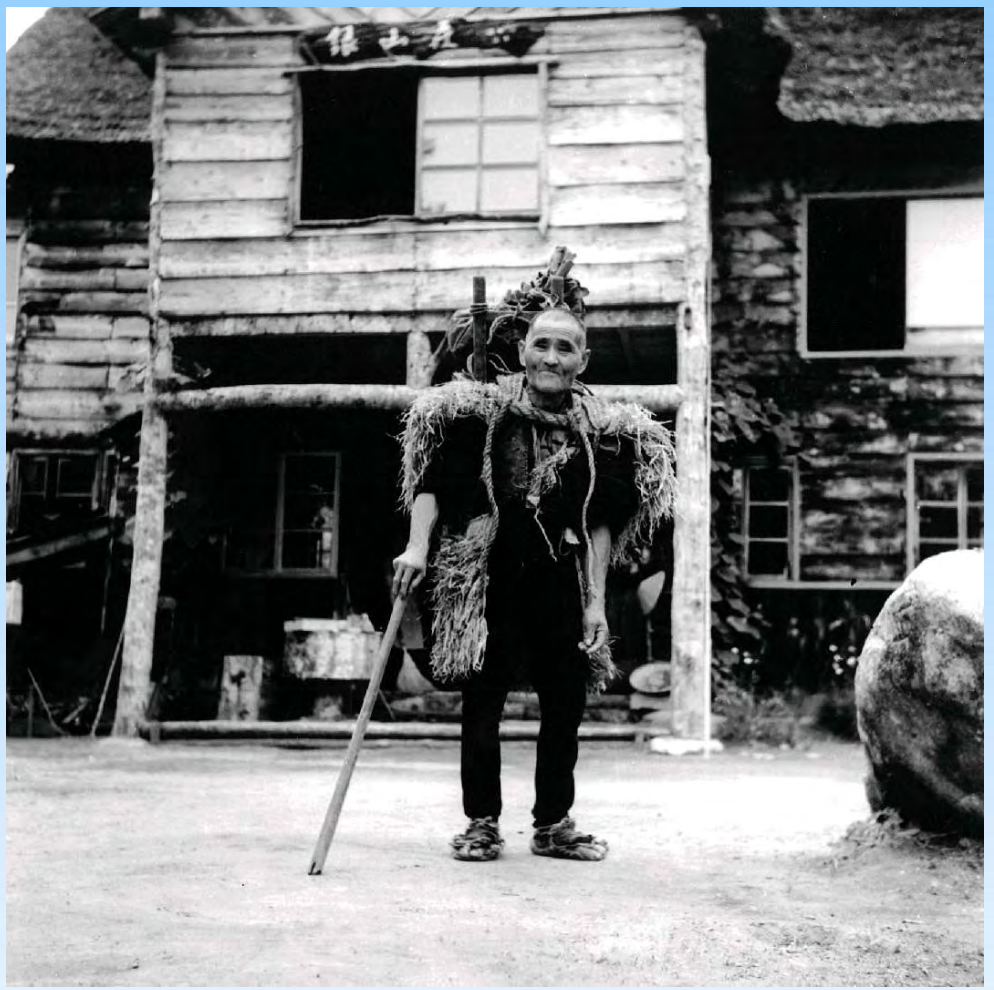
人々の楽しみ

開拓村での生活は決して裕福なものではなく、また、厳しい自然の脅威にさらされたものでしたが、その中でも人々は楽しみを見つけながら暮らしていました。四季折々の自然の美しさにほっと一息つくこともあったでしょう。山の幸は季節の訪れを告げ、人々の生活に恵を与えてくれました。

開拓村の人たちは、粟・稗・とうもろこしなどを原料にした自家製酒をつくりました。甕で一冬越したそれは、とろりとした琥珀色のまろやかな酒だったといいます。日々の疲れを癒してくれる小さな楽しみだったことでしょう。

毎年９月15日には、波拝の虚空蔵菩薩のお祭りがありました。この日ばかりは飲めや歌えの大騒ぎ、里から運び上げた焼酎と相撲大会などで大いに村人は楽しみました。娘たちは精一杯の晴れ着を身にまとったといいます。

今でも、９月15日に大福十二山神社でお祭りが行なわれています。



源太郎さん
（魚沼市　櫻井琢也さん提供）

春の楽しみ　フキノトウ
（長岡市　高田道夫さん撮影）

4．ダム湖に眠るユートピア　ダム建設から現在まで

ダムの建設とともに

戦後の電力需要の高まりとともに、只見川の水資源を利用した電力開発の必要性が唱えられるようになりました。そして、昭和 28 年に国策会社「電源開発株式会社」が奥只見ダム建設のために小出に事務所を設立したのを皮切りに、着々とダム建設が進められていきました。現在のシルバーラインはダム建設のための資材輸送用のトンネルとして昭和 29 年に着工されたものです。ダム建設現場の八崎には、最盛期で五千人もの作業員が生活していました。

そして、昭和 33 年、開拓村の集落のうちダムに水没する集落の人々が山を下りるときがきました。開拓村は、只見川上流の鷹ノ巣と北ノ又川上流の石抱を残して全て水没することになったのです。同時に、かつての人々が鱒獲りにはげみ、銀山開発で賑わった地も湖底に沈むことでもありました。

立ち退く人たちは、出身の村に帰る人もいれば、別の地で暮らす人もありました。こうして、明治 43 年から続いた開拓村の歴史は、ここで一区切りつけられることになりました。しかし、唯一、鷹ノ巣には 12 戸が残り、昭和 42 年に全戸が下山するまでは一年を通してここで暮らし続けました。

奥只見湖が出現すると、やがて山奥の静かなこの地も観光地へと変貌してゆきました。豊かな自然はすべて観光資源となり、釣人、ハイカーなどで賑わうようになりました。鷹ノ巣や石抱の人々は、これまでどおり山の幸を採集するほかに、釣り人や尾瀬のハイカー、登山客相手の民宿を営むようになりました。

現在の鷹ノ巣

現在、鷹ノ巣周辺では約 15 戸が雪解け後にやってきて、民宿の経営や、山菜採り・畑作を行なっています。点在するそば畑や家の造りから、かつての開拓村の姿を伺うことができます。輝く新緑、野鳥のさえずり、満天の星、燃え盛る紅葉、冬を待つばかりの静かな林・・・、四季折々の自然が訪れる人を癒してくれます。

現在３戸の民宿はそれぞれに個性的です。地粉をつかった手打ち蕎麦はここでしか味わうことのできない逸品です。そうかと思えば、おしゃれな洋食やカクテルなどでおもてなししてくれる民宿もあります。民宿を利用する人は近年多様化していて、釣り人や登山客以外にも、ただのんびりとするために訪れる人もいます。

ここは時がゆっくりと流れているような、静かで素朴な場所です。山懐に抱かれたかつての開拓の村は、静かに皆さんの訪れを待っています。

鷹ノ巣　原野にひろがるソバ畑

夏の住居
民宿以外にも老夫婦の夏の住居が十軒近く現存する

原野に続く道

ガイド作成にあたりご協力いただいた皆様 （敬称略、名前五十音順）

【情報を提供してくださった方々】
安達健一、安達キヌコ、井沢学、磯部剛、上重康、魚沼漁業協同組合、
魚沼市観光協会、魚沼市、魚沼土地改良区、内田弘義、大原主計、杵淵正夫、
櫻井修、桜井昭吉、櫻井琢也、桜井伸明、櫻井文壹、佐藤俊介、佐藤朋市、
高田道夫、高綱勤、電源開発株式会社、東北電力株式会社、富永三千敏、
早川典生、星昭、星周一、星野正昭　　他、地域の大勢の皆様

【編集会議の方々】
井口貴之（魚沼市）
井上恵（湯之谷中学校）
内田弘義（魚沼自然大学）
金安健一（小出中学校）
桑原幸子（魚沼市観光協会）
小林民弥（井口小学校）
権平哲三（新潟県魚沼地域振興局）
桜井昭吉（奥只見郷ネイチャーガイド）
高橋健一（小出小学校）
田中六郎（佐梨川河川モニター）
富永三千敏（湯之谷温泉郷・尾瀬ルート活性化委員会）
中俣友子（東湯之谷小学校）
長谷川成生（魚沼・小千谷地域理科教育センター）
早川典生（NPO法人水環境技術研究会）
星雅美（魚沼市）
星義広（魚沼市）
町田昌（魚沼・小千谷地域理科教育センター）
渡辺隆（魚沼市）

事務局：新潟県魚沼地域振興局地域整備部

参考文献（新潟県が所有する報告書・データ集以外のもの）

1) 山之内喜七：湯之谷の石佛、湯之谷村教育委員会（2004）
2) 新潟県渓流釣り団体連絡協議会：新 新潟の渓流と釣り、新潟日報事業社（2003）
3) 磯部定治・櫻井文壹：銀山平を拓いた人々、銀山拓殖株式会社・新潟日報事業社（2001）
4) 湯之谷村教育委員会：湯之谷村　立村100周年記念　湯之谷のあゆみ、湯之谷村（2001）
5) 新潟県：新潟県地質図（2000年版）、（2000）
6) 柏瀬裕之、岩崎元郎、小泉弘：日本登山大系２　南会津・越後の山、白水社（1997）
7) 電源開発株式会社：湯之谷揚水発電所環境影響評価書、（1997）
8) 電源開発株式会社：湯之谷揚水発電所環境影響評価書（別冊）、（1997）
9) 小出町教育委員会：小出町史上巻・下巻、小出町（1996）
10) 魚沼漁業協同組合：母なる川悠久　―魚沼漁協のあゆみ―、（1993）
11) 小出町：小出島地区土地区画整理事業誌、（1993）
12) 磯部定治：魚野川物語、野島出版（1985）
13) 小出郷土地改良区：小出郷土地改良史　上巻、（1988）
14) 小出町教育委員会：小出町歴史資料集　第三集　近世銀山論、（1982）
15) 湯之谷村立理科センター：湯之谷の自然その1　佐梨川の石ころ、（1976）
16) 星野徳市郎：越後国魚沼郡薮神庄湯之谷郷、新潟県北魚沼郡湯之谷村役場（1969）

★　このガイドブックの概要を掲載したパンフレット（A1サイズカラー裏表印刷・A5サイズ折）もあります。
魚沼市内の観光施設、インフォメーションセンターなどでお求めください。（無料）

★　このガイドブックやパンフレットは新潟県魚沼地域振興局のホームページにも掲載しています。どうぞご利用ください。

http://www.pref.niigata.lg.jp/uonuma_seibi/　→　バナーをクリック！

★　携帯サイトでも簡単な案内と、河川気象情報をご覧いただけます。こちらもどうぞご利用ください。

佐梨川・只見川　川ガイド　　平成21年３月発行
◆発行/新潟県魚沼地域振興局地域整備部
〒945-0004　新潟県魚沼市大塚新田91-4　電話（025）792-4211
◆編集/「佐梨川・只見川 川ガイド」編集会議、新潟県魚沼地域振興局、㈱エコロジーサイエンス
◆印刷/株式会社　第一印刷所

新潟県